

日本古典文学における〈林〉の変遷―前編―

野呂香^{*1} 早川芳枝^{*2} 古田正幸^{*3}

本稿では、日本古代文学における〈はやし〉の変遷を考察した。その結果、奈良時代の和歌では、人為的に管理された樹木が繁る身近な日常生活の場所であったが、平安時代の和歌では雲林院を〈くものはやし〉と詠むことを媒介として、仏教的色彩が強まり、ある種の非日常の場所となった。一方、奈良時代の散文では最初、身近で日常的な採集の場所であったが、現実から逃れ身を隠す場所の意を持つようになり、『続日本紀』における「山林」の語の登場によって仏教の修行をする場所へと変化する、そして平安時代の仮名散文では、漢籍や仏教の影響から、出家者の住む場所そのものが「山林」と表現される例もあらわれ、日常生活の場所とは異なる非日常の場所へと意味が変化した。日本古代文学においての〈はやし〉は、奈良時代の身近で日常的な採集の場所としての意味を失い、漢籍や仏教を媒介として平安時代に非日常の場所としての意味を改めて得たのである。

キーワード…日本古代文学、和歌文学、上代文学、平安文学、林、語彙ソフト

はじめに

編)―漢字文化受容を中心に―」において考察されている。その要旨をまとめると次のようになる。

現代の日本では一般に、樹木が繁っているところを〈もり〉や〈はやし〉と呼び、〈もり〉と〈はやし〉をほぼ同義の語として用いている^{*}。しかし、平安時代以前の古代日本では、〈もり〉は〈はやし〉と同じではなかった。既に、古代日本における〈もり〉の変遷は、大野寿子ほか「トポスとしての〈森〉の系譜(古代中世

八世紀から九世紀の〈もり〉は、神木を中心とした空間を示す語として用いられていたが、一〇世紀初めの『古今和歌集』の登場によって、〈もり〉は、神木を中心とした空間の意から神社という場所の意へと変化を始める。それ以後の和歌の類型化によって、一〇世紀半ばには、地名を冠して歌枕となり、神社の意とな

る。その一方、散文においては、神木を中心とした空間の意から、神木そのものを意味するようになり、一一世紀に入ると、和歌における〈もり〉と、散文における〈もり〉の融合が見られ、実景から観念上の〈もり〉へと変容し、その本義であった神木を中心とした空間の意を失い、多くの樹木の繁っている神社の意へと統合されていく^{三〇}。

したがって、古代日本における〈もり〉は、神社と強く結びついた語であり、単に樹木が繁っている場所を示すことはなかったのである。さらに付言すれば、古代日本の〈もり〉は、和歌の規範となった『古今和歌集』への入集を契機とし、多くの和歌に詠まれた。そのため、古代日本における〈もり〉の変遷は、和歌を媒介としたものであり、散文における〈もり〉も和歌の影響を強く受けたものであった。

では、古代日本における〈はやし〉は、どのように変遷したのであるうか。本稿では、日本古代文学における〈はやし〉の変遷を、一三世紀以前の古代和歌、奈良時代の散文、さらに平安時代の散文における用例から考察する^{四〇}。

一 古代和歌における〈はやし〉

本章では、古代和歌における〈はやし〉を概観する。古代和歌における〈はやし〉については、既に、野呂香「日本古代文学における自然描写の変遷—和歌における〈はやし〉と〈もり〉の接近—」^五で検証されている。しかし、本稿で、古代日本における〈は

やし〉の変遷を考察するにあたり、和歌における変遷を踏まえるべきであると考えられるので、以下に概略を示す。

現存する最古の歌集である『万葉集』^六では、〈はやし〉の用例は、九首一〇例あるが、ものが多い意で用いられている一首^七を除いた八首を次に示す。

綜麻かたの林〔林〕の前のさ野榛の衣に付くす目に付く我が背
 (『万葉集』、卷一・二九)

かけまくも ゆゆしきかも……み雪降る 冬の林〔林〕にへに云ふ「木綿の林〔林〕」……

梅の花散らまく惜しみ我が園の竹の林〔波也之〕にうぐひす
 (『万葉集』、卷二・一九九)

鳴くも
 (『万葉集』、卷五・八二四)

江林〔江林〕に伏せる猪やも求むるに良き白たへの袖巻き上げて猪待つ我が背
 (『万葉集』、卷七・二九九二)

橘の林〔林〕を植ゑむほととぎす常に冬まで住み渡るがね
 (『万葉集』、卷十・一九五八)

鹿玉の寸戸の林〔波也之〕に汝を立てて行きかつましじいをお立たね
 (『万葉集』、卷十四・三三三三)

広橋を馬越しがねて心のみ妹がり遣りて我はここにしてお本
 (『万葉集』、卷十四・三三三三)

み園生の竹の林〔林〕にうぐひすはしき鳴きにしを雪は降り
 (『万葉集』、卷十九・四二八六)

つづ

どの用例も複数の樹木が繁っている空間・場所を示しているが、ただ樹木が繁っているだけではない。八二四番歌、一九五八番歌、四二八六番歌では、庭園の〈はやし〉が詠まれている。したがって、全くの自然林ではなく、人の手によって管理された〈はやし〉である。さらに、一二九二番歌、三三三三番歌、三五三八番歌本歌においても、〈はやし〉に人が立ち入っており、これらの〈はやし〉は、人が入ることもできないような手つかずの自然林ではない。『万葉集』の〈はやし〉は、単に樹木が繁っているというよりは、人為的に管理された樹木群を〈はやし〉と呼んでいる。また、比較的〈はやし〉と詠者の距離が近く、詠者にとって身近で日常的な場所でもある。

ところが、平安時代に入ると和歌における〈はやし〉の用例は極端に少なくなる。平安前期の和歌における〈はやし〉の例は、次に示した『業平集』^八と『躬恒集』の二例のみである。

いこまの山を見れば、くもりみはれみたちあるくもやま
ず

きのふけふくものたちまひかくろふは花のはやしをうしとな
りけり
〔業平集』、三四〕

延喜十八年八月十三日、右大臣家八講おこなふに、于時
仏法僧といふとりなく、有感このうたをたてまつる

あしひきの みやまにすらも このとりは たににやはなく
いかなれば しげきはやしの おほかるを……

『業平集』では、生駒山の花咲く木々を「花のはやし」と表現し、『躬恒集』では、鳥が鳴く理由を「しげきはやし」が多いからと詠む。生駒山や深山の〈はやし〉は、庭園などの人為的に管理された樹木群ではなく、詠者との距離もあり、身近で日常的な場所ではない。これらの〈はやし〉は、『万葉集』とは異なり、単に樹木の繁った場所として詠まれている。『万葉集』に詠まれた人為的に管理された身近で日常的な場所としての〈はやし〉は、平安時代には引き継がれていないのである。

『万葉集』に詠まれた身近で日常的な場所としての〈はやし〉の喪失によって、平安前期の和歌では、それまでとは全く異なる〈はやし〉が詠まれるようになる。その最初の例が、宇多天皇の家集である『寛平御集』に見える。

子日しに、ふな岡にみゆきしたまへりけるに、そのついでに雲林院におましますべしとありけるが、さもあらざりければ、遍昭が子の由性僧都の、殿上のひとのなかに
きこえける

春霞くものはやしによりこねばくさきもさらに冬ごもりけり
〔寛平御集』、一〕

京都市北区紫野にあった桜や紅葉の名所である雲林院という寺院の名を、〈くものはやし〉と詠んでいる。この〈くものはやし〉

は、雲林院そのものを指す語であり、それ以前の樹木が繁る（はやし）ではない。しかし、この〈くものはやし〉の登場によって〈はやし〉は〈くものはやし〉、ひいては雲林院の〈はやし〉の意を強める。天曆五（九五二）年以降に成立した第二勅撰和歌集である『後撰和歌集』には、次のような歌が入集している。

（題しらず）

立ちよりて見るべき人のあればこそ秋の林にしきしくらめ

（『後撰和歌集』、秋下、四〇八、よみ人しらず）

右の歌では、〈はやし〉に紅葉の散るさまを詠む。『万葉集』では、〈はやし〉が竹や橘といった常緑樹で構成されていたこともあり、〈はやし〉の紅葉する様子を詠んだ歌はなく、秋の景物とはならなかった。しかし、紅葉の名所であった雲林院を媒介として、〈はやし〉は紅葉するものとなり、秋の景物となる^九。さらに、寛弘二（一〇〇五）年頃に成立した第三勅撰和歌集『拾遺和歌集』では、月林寺を〈つきのはやし〉と詠む例もあらわれ^十、〈はやし〉は寺院の〈はやし〉として認識されるようになり、仏教的色彩を帯びる^{十一}。

続く、平安中期には、次のような〈はやし〉が詠まれるようになる。

二月十五夜に

さよなかのたきぎの煙たちそひてはやしのかすみひまなかり

けり

（『源賢法眼集』、一五）

二月十五日は釈迦が入滅したとされる日であり、釈迦の入滅した場を鶴の林というが、右の用例も、それを踏まえた〈はやし〉である。また、一二世紀に成立した歴史物語『栄花物語』^{十二}には、鶴の林という名称を持つ巻があり、藤原道長の葬送が語られるが、その中に次のような和歌がある。

何ごともあはれに悲しかりつるに、忠命内供といふ人こそ鳥辺野にておほえけれ。後にもり聞えたりし、

煙絶え雪降りしける鳥辺野は鶴の林の心地こそすれ

となんありける。かの沙羅双樹の涅槃のほどを詠みたるなるべし。 （『栄花物語』鶴の林、一七一―一七二頁。）

忠命内供という人が、葬送を行った鳥辺野で詠んだ歌に「鶴の林」の語があり、釈迦の入滅のことだと説明されている。この歌は、後に第四勅撰和歌集である『後拾遺和歌集』^{十三}にも入集しており、〈つるのはやし〉は、釈迦入滅の場を表す歌語として定着し、仏教に関する和歌である釈教歌などを中心に詠まれていく。平安中期には、前期にあらわれた寺院名の〈はやし〉に加え、〈つるのはやし〉といった語が詠まれ、〈はやし〉の仏教的色彩は強まることになる。

しかし、平安後期になると、その傾向にも変化があらわれる。中期に発達した〈くものはやし〉や〈つるのはやし〉も引き続き

詠まれるが、仏教的色彩の稀薄な(はやし)も詠まれるようになってくるのだ。たとえば、長治元(一一〇四)年に行われた源広綱主催の歌合^{十四}では歌題に「林間蟬声」が見える。

八番 林間蟬声 左 僧俊賀

ゆくかげの雲の林になく蟬はこゑも友にぞたかくきこゆる

(『散位源広綱朝臣歌合長治元年五月』、一五)

右 僧俊賀

夏木だちしげき梢になくせみの声きくからにあつくも有るか

な (『散位源広綱朝臣歌合長治元年五月』、一六)

俊賀の歌は、(くものはやし)の蟬の声を詠んでいるが、俊義の歌では(はやし)が「夏木だちしげき梢」と表現されており、(はやし)本来の樹木が繁っている場所としての認識に回帰している^{十五}。また、長治二(一一〇五)年頃に詠進されたと言われる『堀河百首』^{十六}でも、「竹」という題において、次のような歌が見える。

すずしさにいく夜かねぬるくれ竹の林は夏のふしどなりけり

(『堀河百首』・一三一四・匡房)

さらに、長承年間(一一三二～五)に成立した『為忠家初度百首』では、「竹林鶯」の題が見え、続く『為忠家後度百首』でも「林頂蟬」の題が詠まれており、歌合や百首歌といった題詠によって、

歌題を構成する要素の一つとして(はやし)が積極的に用いられるようになる。

以上、古代和歌における(はやし)を概観してきた。奈良時代の『万葉集』では、人為的に管理された樹木が繁っている場所であり、歌人たちも立ち寄るような、身近な日常生活の場所であった。しかし、平安時代に入り、歌語としての(はやし)は失われ、和歌での用例は皆無となり、新たに雲林院を(くものはやし)と詠むことを媒介として、寺院の(はやし)の意を帯び、(つるのはやし)が詠まれるなど仏教的色彩が強まる。それによって、(はやし)はある種の非日常の場所となった。平安後期には、題詠の発達により、複数の樹木が繁っている空間・場所として、再び詠まれるようになり用例も増加する。

したがって、詠歌対象としての(はやし)は、奈良時代から平安時代への連続性を持たない。その最も大きな理由は、延喜五(九〇五)年成立の第一勅撰和歌集『古今和歌集』への入集がなかったことである。(もり)の場合に、「おほあらしのもり」という表現が『古今和歌集』の撰者^{十七}に好まれ、その後も多くの歌に詠まれたことは対照的に、(はやし)は、『古今和歌集』に入集せず、撰者にも好んで詠まれた形跡がない。『古今和歌集』は、歌人たちにとって規範となるものであったから、規範のない(はやし)は、歌人にとって詠歌の対象とはなりがたかった。そのために、平安時代に、新たに(はやし)を獲得する必要が生じたと考えられる。

林」あり。……

梓山 郡家の東南のかた五里二百五十六歩なり。南と西とは並びに樹林「樹林」あり。……

〔出雲国風土記〕神門郡、二〇九頁

丁神門の海水 ……地の形體は壤と石と並びになし。白沙のみ積上りて、即ち松の林「松林」茂繁れり。四の風吹く時は、沙、飛び流れて松の林「松林」を掩ひ埋む。……松山の南の端なる美久我の林「林」より起まりて、……

〔出雲国風土記〕神門郡、二二一―二三頁

用例Aは、意宇郡拜志郷の地名の由来で、大神が〈はやし〉が盛んに繁っているこの地を見て、「心を昂揚させるハヤシ」だと述べたことから、この地はハヤシと呼ばれているとある。したがって、傍線を付した「樹林」は樹木が繁っているところを意味する〈はやし〉であるが、波線を付した「拜志」、「林」は地名、二重傍線を付した「波夜志」は、引き立てるものを意味する語として用いられている。

用例B～Fは、嶋根郡の浜や島の様子についての記述であるが、どの用例でもマツの林があることが記されている。水辺に松林があるという点では、用例Jも同じである。用例Jは、「神門の海水」という湖についての記述で、湖畔には白い砂浜があり松林が生い茂っているが、風の強い日には砂が松林を覆い尽くすとある。

用例G～Iは、山についての記述である。用例Gでは、足高野山にはいわゆる〈はやし〉はないが、山頂に「神の杜」としての

〈はやし〉があると記されている。『出雲国風土記』秋鹿郡の編者は、たとえ樹木が繁っていても、そこが神社であれば、〈はやし〉ではないと認識していたと考えられる。

ところで、『出雲国風土記』では、〈はやし〉は「樹林」と表記されている^{二十一}。松林を「松樹林」とは記さず、「松」の「林」と表記し、〈はやし〉を「樹」の「林」と表記することからは、〈はやし〉の語は樹木の種類と分かちがたい関係を持っていたことがうかがわれる。たしかに、『出雲国風土記』における山の記述には、次のように〈はやし〉とは記されないが、樹木の種類を記した例がある。

田俣山 郡家の正南一十九里なり。柁・粉あり。

長柄山 郡家の東南のかた一十九里なり。柁・粉あり。

吉栗山 郡家の西南のかた廿八里なり。柁・粉あり。謂はゆる天の

下造らしし大神の宮の材を造る山なり。

〔出雲国風土記〕神門郡、二〇九頁

右の用例からは、「田俣山」や「長柄山」、「吉栗山」には、ヒノキやスギがあったことがわかる。特に「吉栗山」のヒノキとスギは、波線を付したように、出雲大社の社殿の建築材であり、計画的に維持管理されていた可能性が高い。樹木が繁っている中でも、人為的管理の行われている場所、すなわち、人が日常的に入りする身近な場所が〈はやし〉と称されてたと考えられる。先に示した、用例Gで、神社の〈はやし〉が〈はやし〉ではないと

されていたのは、人為的管理の有無によるものだと考えれば理解しやすい。人為的に管理し、人々が利用する場所であるからこそ、樹木の種類が重視されたともいえる。

次に示した六例は、『常陸国風土記』^{二十二}における〈はやし〉の用例である。

a 野の北に、櫟・柴・鶏頭樹・比之木、往々森々に、自から山林〔山林〕を成せり。

〔常陸国風土記〕行方郡、五三頁

b 其の西、榎木林〔林〕を成せり。

〔常陸国風土記〕行方郡、五九頁

c 其の周の山野は、櫟・柞・栗・柴、往々林〔林〕を成す。

〔常陸国風土記〕行方郡、六三頁

d 松の林〔松林〕自らに生ひ、椎・柴交雜り、既に山野の如し。

〔常陸国風土記〕香島郡、七二頁

e 近き山には、自ら黄葉の林〔林〕に散る色を覽、……

〔常陸国風土記〕香島郡、七五頁

f 慈れる樹は林〔林〕を成して、上に即ち幕ひ歴き、淨き泉は淵を作して、下には澗ぎ浚る。

〔常陸国風土記〕久慈郡、八三頁

ここでも樹木の種類が重視されている。イチイ、クリ、クヌギ、ヒノキなどは、奈良時代には建築材や食料、染料として、日常生活の中で使用されていた樹木であり、用例 a の「おのずから」を

文字どおり解釈するなら、これらの木が自然に生えていて〈はやし〉を形成しているということになる。しかし、用例 d では、シイやクヌギの〈はやし〉にマツが自生してしまうと、そこは〈はやし〉ではなく「山野」であるという。管理が不十分であれば〈はやし〉ではないのである。『風土記』における用例からは、〈はやし〉が生活していく上で利用価値の高い樹木で構成された人為的管理下にある場所であり、当時の人にとってそこが身近で日常的な採集の場所であったことを推察させる。

次に、中国の史書を模倣して編纂され、養老四（七二〇）年に成立した史書『日本書紀』を検証する。『日本書紀』^{二十三}では、固有名詞以外の〈はやし〉の用例は十余例と少なく、『風土記』同様、身近で日常的な採集の場所として用いられる。たとえば、神功皇后摂政元年三月五日の記事には次のようである。

軍衆走ぐ。狹狹浪の栗林に及きて多に斬りつ。是に、血流れて栗林に溢く。故、是の事を悪みて、今に至るまでに、其の栗林の菓を御所に進らず。

〔日本書紀上〕、三四八頁

神功皇后による忍熊王征伐の際、敗走した忍熊王一行が「栗林」に逃げこみ、ほとんどの兵が斬り殺される。「栗林」に多くの血が流れたことを嫌い、その「栗林」のクリを献上させなかったとある。この「栗林」を含め、こういった〈はやし〉が採集を目的としていたことがわかる。当然、人為的に管理されていたと見て

よい。

その一方で、次にあげる例のように、何らかの事件やできごと
に際し、身を隠す場所としての〈はやし〉がある。

ア弟媛、乗輿車駕すと聞きて、則ち竹林たかば「竹林」に隠る。

〔日本書紀上〕、二八四頁

イ小林をばやし「小林」に 我を引入れて 奸し人の 面も知らず

家を知らずも 〔日本書紀下〕、二五八頁

用例アでは、弟媛が求婚に来た景行天皇から身を隠すために竹林に隠れている。また用例イは、民衆の間で流行し、未来における事件をあらかじめ予兆していると考えられた童謡である。字義通りにこの童謡を解釈するならば、〈はやし〉の中に私を引き入れて奸した人の顔も知らない家も知らないという意味になる。〈はやし〉は人目を忍んで性交するために身を隠す場となっている。先に示した神功皇后撰政元年三月五日の記事でも、敗走する兵が栗林に逃げ込んでいた。『日本書紀』における〈はやし〉は、身近で日常的な採集の場所でありつつも、求婚、戦争、衆目という現実から逃れ、身を隠す場所としての機能を持つようになったといえる。

最後に、官撰史書『続日本紀』を検証する。『続日本紀』が成立したのは平安時代初頭の延暦一六（七九七）年であるが、該書は、文武天皇元年（六九七）年から桓武天皇の延暦一〇年（七九一）年までの奈良時代のできごとを記録をもとに編纂したものであ

る。よつて、本稿では奈良時代の散文として取り扱う^{二四}。『続日本紀』^{二五}中の〈はやし〉は九例で、二つの傾向を示している。まずは単なる土地としての〈はやし〉であり、もう一つは出家した僧たちが修行する場としての〈はやし〉である。

土地としての〈はやし〉は四例あり、そのうちの三つは許可なく山林を私有地に組みこまないようにという命令の中に出てくる。たとえば文武天皇の慶雲三（七〇六）年三月一日には次のような詔が発せられている。

頃者、王公諸臣、多く山沢を占めて、耕種を事とせず。競ひて貪婪を懐ひて、空しく地の利を妨ぐ。……今より以後、更に然ること得ざれ。但し、氏々の祖の墓と百姓の家の辺とに、樹を栽えて林はやし「林」とすること、併せて周二三十許歩ならむは、禁の限に在らず。 〔続日本紀一〕、一〇三〜五頁

ここでは高位高官の者が山や池などの土地を、耕すわけでもないのに占有し農耕をさまざまにしていることを批判している。その一方で、「樹を栽えて林とすること」に関しては例外として扱っている。山野で自生している〈はやし〉を勝手に占有することのみが罪に問われるのである。なお、このような輩は後代にも存在したらしく、桓武天皇の延暦三（七八四）年にも一月三日に「広く林野「林野」を占め」^{二六}ることを禁止し、二月一三日にも「山林「山林」を包ね并せて」^{二七}利益を独占することを禁じている^{二八}。

一方、仏教的な文脈であられる〈はやし〉は五例ある。たとえば淳仁天皇が天平宝字二年八月一日に出した国の許可をえず勝手に出家した私度僧の処遇に関する詔には次のような一文がある。

天下の諸国の山林〔山林〕に隠る清行の近士、十年已上は皆得度せしめよ。
〔続日本紀三、二七七頁〕

ここでは正式な手続きを取らずに出家することを「山林」に隠れると表現している。すなわち、俗世間の外の世界に属する場所が「山林」なのである。同様の用例は光仁天皇の宝亀元年一〇月二三日の僧綱の上表にもある。

去ぬる天平宝字八年の勅を奉けたまはりて、逆党の徒、山林〔山林〕寺院に於て、私に一僧已上を聚めて、誑経悔過する者には、僧綱固く禁制を加ふ。是に由りて、山林〔山林〕樹下、長く禅迹を絶ち、伽藍院中、永く梵響を息むれども、俗士の巢許、猶嘉遁を尚ぶ。
〔続日本紀四、三三二頁〕

天平宝字八（七六四）年九月におきた惠美押勝の乱の際に、惠美押勝派の残党が山林すなわち僧たちの中に紛れこむことを防ぐために発せられた詔があり、この上表はその詔を見直すよう進言したものである。この他に天平元（七二九）年四月条にも仏教の

修行の場所としての「山林」^{二十九}の語が見え、天平神護二（七六六）年正月条には釈迦の入滅の場である沙羅双樹を意味する「双林」^{三十}も見える。

しかし、このような例は〈はやし〉ではあっても「山林」等の形で用いられており、〈はやし〉と仏教的な「山林」は区別されていたと見られる。奈良時代にも出家遁世は、政情が自分に不利な場合に世間から身を隠すための常套手段として使われた。遁世するという意味での「山林」に入るという行為も、世間から隠れるという意味で『日本書紀』の〈はやし〉の用例と通底している。「山林」の語は、平安時代には「やまはやし」として出家することの比喩として用いられるが、その前段階を『続日本紀』の用例に見ることができる。

以上、奈良時代の散文における〈はやし〉の変遷を検証してきた。奈良時代の散文における〈はやし〉は、『風土記』では、人為的管理下にある場所であり、当時の人にとってそこが身近で日常的な採集の場所として認識されているが、『日本書紀』では、採集の場所でありつつも、現実から逃れ身を隠す場所となっている。『続日本紀』では、『風土記』、『日本書紀』の〈はやし〉を引き継ぎつつも、「山林」の語の登場によって仏教の修行の場へと変化するのである。

三 平安時代の散文作品における〈はやし〉

本章では、平安期の仮名の散文作品を中心に〈はやし〉の語に

ついでとめていく。平安時代の漢文と和文における〈はやし〉の關係の分析については仁平道明氏にくわしい^{三十一}。よく知られているように、平安期の散文作品は漢詩文などの先行する文学作品からの影響が大きい。その点、〈はやし〉の語も例外ではなく、仁平氏は〈はやし〉について次のように述べている。

典型的和文芸としての平安朝の物語・日記文芸・和歌等の〈林〉は、そのほとんどが仏教的なものをも含めた「漢」の世界を背景としていたことになる^{三十二}。

この見解は極めて穏当かつ妥当なものというべきで、後述するように平安期の仮名散文における〈はやし〉の用例は、大半が漢籍の影響下にあり、特に仏典からの影響が強いものと考えられる。

また、平安期の散文作品の語彙は、和歌の影響も強くうけている。本稿の一章でも指摘するように、『古今和歌集』に〈はやし〉を読み込んだ歌が入集しなかったために、〈はやし〉から和歌の詞、歌語の意識が失われた可能性は強いだろう。『凌雲新集』^{三十三}、『文華秀麗集』^{三十四}、『経国集』^{三十五}の勅撰漢詩集に、多くの〈はやし〉を含む漢詩が入集したのとは好対照である。平安中期以降、歌語としての〈はやし〉は急速に「漢」的な語彙になっていったものと思われる。

もちろん、平安期に流布していた作品の全てが現存しているわけではないため、散逸した作品の中に〈はやし〉の語が見られた可能性が全くないわけではない。特に、「作り物語」に関してい

えば、鎌倉時代以前はその価値が和歌に比べると相対的に低かったと考えられ、現存する作品数も決して多くない^{三十六}。しかし、鎌倉期に成立し、多数の散逸物語の和歌と、その逸文を詞書に含む『風葉和歌集』^{三十七}に、〈はやし〉の語は『うつほ物語』^{三十八}から採られた一例しか見られない^{三十九}。後に述べるように、『うつほ物語』は他と比較して〈はやし〉の語が多い作品である。『風葉和歌集』で唯一〈はやし〉の語の和歌が入集したのは偶然ではあるまい。少なくとも、平安期の散逸物語には、〈はやし〉の語が作品の主要場面や、根幹となる秀歌に関わった作品はほぼなかったと見なしてよいだろう。

以下、〈はやし〉の用例数を、現存する主要な平安期の散文作品ごとにまとめると、次の【表1】のようになる^{四十}。

【表1】を一見すると、対象とした作品の用例のうち、『うつほ物語』の用例数が全体の約六〇%を占め、極めて多いことがわかる。次いで用例数の多い『栄花物語』^{四十一}は、「詞林」を言い換えた「詞の林」や、「功德」が多いことを示す「功德の林」など、木の〈はやし〉とは異なる比喻表現を含んでいる。樹木そのものに関連する語彙としての〈はやし〉の用例は、『うつほ物語』が突出して多いといつてよいだろう。

『うつほ物語』は漢文的表現が極めて多く、そのことから作者に男性が想定されることが多いほどである。『うつほ物語』に用例が多いこと自体、〈はやし〉の語が持つ漢文的な性格をよくあらわしているといえよう。逆に、『竹取物語』^{四十二}、『落窪物語』^{四十三}に全く〈はやし〉の語が見られないこと、『うつほ物語』の一・

【表1】平安期の散文作品における〈はやし〉の用例

作品名	「林」の用例													備考
	山林	花の林	松の林	紅葉の林	栴檀の林	竹の林	雲の林	鶴の林	娑羅林	詞の林	功德の林	その他	計	
『伊勢物語』	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
『大和物語』	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
『平中物語』	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
『竹取物語』	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
『うつほ物語』	12	4	4	3	1	0	0	0	0	0	0	16	40	林院2
『落窪物語』	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
『源氏物語』	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	5	雲林院1
『狭衣物語』	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	
『浜松中納言物語』	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	
『夜の寝覚』	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
『多武峯少将物語』	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
『篁物語』	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
『堤中納言物語』	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
『栄花物語』	2	0	0	0	0	0	1	3	1	1	1	1	10	
『大鏡』	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	雲林院1、禅林寺1
『今鏡』	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
『土左日記』	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
『蜻蛉日記』	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2	雲林院1
『和泉式部日記』	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
『紫式部日記』	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
『讃岐典侍日記』	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
『更級日記』	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
『枕草子』	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	雲林院2
調査用例数計	19	6	4	3	1	2	2	3	1	1	2	22	66	

五倍以上の長さを持つ『源氏物語』^{四十四}にわずかに五例しか用例が見られないことは興味深い。たとえば『竹取物語』は竹やぶで竹

を採る翁が冒頭部に登場する。そうした際に〈はやし〉の語が用いられることはない。

また、『土左日記』^{四十五}をはじめとする日記文学作品においては、〈はやし〉の語はほとんど見られない。これは、そもそも平安期の貴族、特に仮名文学の担い手たる貴族社会の女性たちが旅に出る機会が少なかったことも関係しているよう。しかし、紀貫之が旅をした経験を元に書かれたと思しき『土左日記』にしても、〈はやし〉の語に限らず、船路から眺めた森林に関する風景などは全く描かれない。

木の生い茂った場所はすなわち「山」であって、山以外に群生する平地の木を実見し、特別に書き記す文化に乏しかったものと考えられる。女性の手になると思しき作り物語をはじめとして、一般に和語が多いと見なされている作品には、〈はやし〉の語の用例は一転して少なくなる。先行研究で指摘されてきたように、平安期の散文作品における〈はやし〉の語は漢文的要素を持った言葉だといえるだろう。

続いて、先行研究でも論じられている、仏教関係の語としての〈はやし〉について確認を行なう。

『栄花物語』に見られる「鶴の林」は釈迦入滅の時に鶴のような白さで枯れた沙羅双樹の喩えである。「娑羅林」も沙羅双樹そのものことと考えてよいだろう。また、「雲の林」は備考にも記載した「雲林院」を言い換えた表現で、これも仏教関係の語といえる。先述の「功德の林」は樹木の〈はやし〉そのものの用例ではないが、やはり仏事に関わる語である。

『うつほ物語』に一例見られる「梅檀の林」の「梅檀」は、様々な仏典に見られることで知られる仏教関連の語である。次節で述べるように、「梅檀の林」という形で用例数こそ一例であるが、前後の文章における〈はやし〉も「梅檀」のものが多い。仏教的な神秘性を持った異国の雰囲気を描くために、「梅檀の林」という表現がとられていると考えられる。

【表1】におさめた〈はやし〉に関連する語彙の中で、最も用例数の多い「やまはやし」は出家することの比喩である^{四十六}。

「……などか山林に行ひたまふとも、ここにだに消息ものたまはぬ。……」(『大和物語』一六八段、四〇七頁^{四十七})

「罪咎もなきに、かくてさぶらはせたまへば、人の国にも隠れ、山林にも入りぬべし」(『平中物語』初段、四五六頁^{四十八})

「……身を碎きて、山林に交じり給ふ人なむ、うらやましくおぼゆる。……」(『うつほ物語』忠こそ巻、一二六頁^{四十九})

「……親、知ろし召しなば、許さるまじく侍りしかば、山林に心急ぎて、まかり出でにしなり」。

(『うつほ物語』春日詣巻、一四六頁)

いみじき大願を立て、あるは、山林に交じりて、金の御嶽・越の白山・宇佐の宮まで参り給ひつつ、……

(『うつほ物語』菊の宴巻、三三二頁)

「……制し給ひし人もおはせねば、今は山林にも深く入りなむと思ひ給ふるを、……」

(『うつほ物語』国譲・上巻、六四六頁)

「……さりとて、山林に引き続きまじらむこと、後の世までいみじきこと」と泣きたまふに、……

(『源氏物語』真木柱巻④二二四頁^{五十})

「……山林に入りまじり、すずろなる田舎人になりなど、あはれにまどひ散るこそ多くはべりけれ。……」

(『源氏物語』宿木巻⑦一七二頁)

右の例のような、「山林」に「行ふ」、「混じる」、「入る」などの典型的な表現は、全て出家する意を示している。『うつほ物語』には、この他にも、次のような「山林」の例が見られる。

「……魂静まらずして、すみやかにまかり籠りて、山林に住みかとし、熊・狼を友とし、……」

(『うつほ物語』吹上・下巻、二八七頁)

これは幼くして出家遁世した「忠こそ」が自らの暮らしを述べる場面である。出家した自らの居所を「山林」と表現している。「山林」を出家した者の住む場所としている点、他の典型的な用例を踏まえて、語の意味がやや変化した表現と認められる^{五十一}。また、物語が大団円を迎える楼の上・下巻では、鳴り響く琴の音の及ぶ場所が、以下のように示される。

四方の山林に聞き分かれて、悲しうあはれなること、世の中は常なきことに、たちまちに思ほえて、涙落つることとめが

たく、あはれなり。

(『うつほ物語』楼の上・下巻、九三〇頁)

この用例は今回調査対象とした作品の「山林」の用例の中で、唯一仏教とは関係のない山や林と考えることも可能な例である。

ただ、『うつほ物語』の他の「山林」の用例が仏教的なものであることを考えると、出家した者がいる場所である「山林」にまで琴の音色が鳴り響き、人々の心を動かしたととらえることもできる。この直後の場面に、次のようにあることも注意を要する。

この琴の音聞こゆること、響き、風に従ひて、近くは、内裏に、(中略) 風につけて聞こゆるを……

(『うつほ物語』楼の上・下巻、九三〇頁)

ここでいう「近くは、内裏に」という表現は、先ほどの「四方の山林」の用例が遠い場所として対比的に表現されていることを意味している。都の中心である「内裏」と都の外にある「山林」が対比の第一義と考えられるが、距離的な問題だけでなく、帝という世俗の最高権力者がいる場所と、出家したものが住む場所の対比表現ともとらえることができるだろう。

以上、調査対象としたほぼ全ての作品において、仏教と関係して〈はやし〉の語が用いられていることを概観してきた。平安期の作品、ことに作り物語は仏教と深い縁がある。そうした作品の語彙の中でも、〈はやし〉は強い仏教色を帯びた語であったとい

えるだろう。

特に、『うつほ物語』における「梅檀の林」や「山林」などの〈はやし〉が持つ仏教的要素を活かした表現は、仏教の持つイメージを物語に帯びさせるだけでなく、その〈はやし〉がある場所を、俗の世界とは切り離された異なる世界として示す効果もあるように思われる。次章において、よりくわしく検討する。

四 『うつほ物語』における〈はやし〉

先述の「梅檀の林」、「山林」も含めて、『うつほ物語』の巻ごとに、〈はやし〉の用例数を整理すると、以下の【表2】のようになる。

【表2】からは、『うつほ物語』全編にわたって〈はやし〉の語が見られるわけではないことがわかる。首巻である俊蔭巻と、吹上・上巻だけで全体の用例の五〇%を占める^{五十二}。この二巻の特徴は、主な舞台が日本や都の「外」にあることである。

俊蔭巻から確認を行なう。俊蔭巻は、清原俊蔭から俊蔭の娘、藤原仲忠へと、三代に及ぶ琴の伝授を描いた巻である。俊蔭は幼い頃から学才を発揮し、一六歳で遣唐使に選ばれる。ところが船団が嵐に見舞われ、三船中二船が難破し、残った俊蔭の船は波斯国に漂着することになる。〈はやし〉の語があらわれるのは、その波斯国における以下の九場面の一〇例である。

A. 清く涼しき林¹の梅檀の陰に、虎の皮を敷きて、三人の人、

【表2】『うつほ物語』巻別〈はやし〉用例数

巻	巻名	梅檀の-	花の-	松の-	紅葉の-	山-	他	計
1	俊蔭	1	0	0	1	0	8	10
2	藤原の君	0	0	0	0	0	1	1
3	忠こそ	0	0	0	0	3	0	3
4	春日詣	0	0	0	0	1	0	1
5	嵯峨の院	0	0	0	0	0	0	0
6	祭の使	0	0	0	0	0	0	0
7	吹上・上	0	3	3	1	0	3	10
8	吹上・下	0	0	0	0	1	0	1
9	菊の宴	0	1	0	0	2	2	5
10	あて宮	0	0	0	0	0	0	0
11	内侍のかみ	0	0	0	0	0	0	0
12	沖つ白波	0	0	1	0	1	0	2
13	蔵開・上	0	0	0	0	0	1	1
14	蔵開・中	0	0	0	0	0	0	0
15	蔵開・下	0	0	0	0	0	0	0
16	国譲・上	0	0	0	0	1	0	1
17	国譲・中	0	0	0	0	0	0	0
18	国譲・下	0	0	0	1	2	0	3
19	楼の上・上	0	0	0	0	0	1	1
20	楼の上・下	0	0	0	0	1	0	1
計		1	4	4	3	12	16	40

並び居て、琴を弾き遊ぶ所に……

B. 俊蔭、林のもとに立てり。
 (『うつほ物語』俊蔭巻、一〇頁)

C. この林より西に、木を倒す斧の声、遙かに聞こゆ。
 (『うつほ物語』俊蔭巻、一〇頁)

D. 住みし林よりこの山を尋ね、父母が手を別れし日より、
 今日までのことを答ふ。(『うつほ物語』俊蔭巻、一二頁)

E. 「……阿修羅を山守りとなされて、春は花園、秋は紅葉

の林に、天女、下りましまして、遊び給ふ所なり。……」

F・G. この林より西にあたれる梅檀の林に移ろひて、この
 琴の音を試みむ……
 (『うつほ物語』俊蔭巻、一三頁)

H. 俊蔭、清く涼しき林に一人眺めて……

I. 山を見れば、霞緑に、林を見れば、木の芽けぶりて、花
 園、花盛りに、面白く……
 (『うつほ物語』俊蔭巻、一四頁)

J. 梅檀の木の木陰に、林に花を折り敷きて琴弾く人、歳
 三十ばかりにてあり。
 (『うつほ物語』俊蔭巻、一五頁)

これらのA～Jの〈はやし〉の用例は、全て俊蔭が漂着した波斯国の用例である。A・B・C・Dの梅檀の林は、俊蔭が最初に
 出会う三人の仙人の居所。E・Fは俊蔭が秘琴を手に入れる山で、
 阿修羅が守る場所。G・H・Iは俊蔭が秘琴を弾く所で、天女が
 降りてくる場所でもある。最後のJは天女の子が住む場所である。
 俊蔭はこの天女の子と琴を弾き、その音はついに文殊や仏の来
 訪を招くことになる。以降、俊蔭巻においては、俊蔭が帰国後、
 娘や孫の仲忠が「うつほ」にもぐる著名な場面も含めて、〈はやし〉
 の語は一例も用いられない。

木の種類が明記されていないE・Fの二例をのぞいた八例は、
 先述のように仏教色の強い梅檀の林である。俊蔭巻における〈は
 やし〉は、明らかに人ではない、仙人や神仏の住む場所として描

かれています。

次に、吹上・上巻の用例を確認する。吹上・上巻は、主人公仲忠の好敵手となる源涼が登場する巻である。源涼は、紀伊国牟婁郡の吹上の浜で、祖父の神南備種松に育てられる。種松は天下に並ぶもののない財力の持ち主で、その財を背景に吹上の浜に立てられた邸も、都の文化とは異なる様相を示している。たとえば、その邸の庭は次のように説明される。

四面巡りて、東の陣の外には春の山、南の陣の外には夏の陰、西の陣の外には秋の林、北には松の林、面を巡りて植ゑたる草・木、ただの姿せず、咲き出づる花の色・木の葉、この世の香に似ず。梅檀、優曇、交じらぬばかりなり。孔雀・鸚鵡の鳥、遊ばぬばかりなり。

〔うつほ物語〕吹上・上巻、二四三頁

吹上の邸は四季の庭を有しており、秋と冬は「秋の林」「松の林」と表現される。この〈はやし〉は、邸を構成する重要な要素となっている。そのことは、次の「絵解」からもうかがえる。^{五十三。}

吹上の宮。南面、大きな野辺のほとり、松の林二十町ばかり、丈等しく、姿同じやうなる。(中略)東面、浜のほとり、花の林二十町ばかりなり。花の御垣のもとまで並み立ち、満つ潮は、御垣のもとまで満ち、干る潮は、花の林の東を限れり。(中略)宮より西、大きな川のほとり、二十町ばかり、

紅葉の林の、丈等しう、数同じ。宮より北面、大きな山のほとり、山より下まで、常磐の木、色を尽くしたり。

〔うつほ物語〕吹上・上巻、二五三〜四頁

この絵解の説明は、概ね先に引用した邸の様子を具体的に解説したものと考えられる。その際、物語本文では「春の山」とあった東面が絵解では「花の林」とされ、南面の「夏の影」が「松の林」とそれぞれ言い換えられていることも注目される。逆に、物語本文で「松の林」とされた北面が、絵解では「常磐の木、色を尽くしたり」と表現されている。物語本文と絵解本文を相互に参照することで、吹上の幻想的な四方四季の邸を構成し、象徴するものが〈はやし〉であることが了解される。

また、その吹上の邸で歓待をうけた仲忠ら一行は、それぞれ次のような和歌を詠んでいる。

人々の御前の折敷どもを見給ひて、仲忠の侍従、花園の胡蝶に書きて、

花園に朝夕分かず居る蝶を松の林はねたく見るらむ

少将、林の鶯に書きつく。

常磐なる林に移る鶯をとぐらの花もつらく聞くらむ

(中略)良佐、山の鳥どもに、

葦繁る島より巢立つ鳥どもの花の林に遊ぶ春かな

〔うつほ物語〕吹上・上巻、二五一頁

右の場面では、仲忠ら一行の吹上の邸に対する感動が、吹上の邸の四季を表現する、常緑の〈はやし〉に託されているものと考へられる。また、その吹上の邸の一角は次のように描かれる。

君たち、花御覧じに、林の院に出で給ふ。

『うつほ物語』吹上・上巻、二五四頁）
よき童して、林の院に奉れり。

四季の庭を鑑賞する場所は、「林の院」とよばれるのである。^{五十四。}

吹上の邸を象徴するものが、〈はやし〉であることは明白であろう。

吹上の邸の〈はやし〉は、俊蔭卷の仙人や神仏の居所で、専ら梅檀によって構成されていた〈はやし〉と異なり、神南備種松の財による、極めて人為的な〈はやし〉であった。しかし、「梅檀」も交じらなければなりとされる点、〈はやし〉をつくった種松が目指したのは俊蔭卷のような神仙の住む世界であったと考えられる。俊蔭卷と吹上・上巻の計二〇例からは、『うつほ物語』の〈はやし〉が現世と異なる世界を描く際の景物であることがうかがえる。

先述の『うつほ物語』に二二例見られる「山林」も、出家する者がおもむく場所、つまり一般の人々の生活の圏外である。『うつほ物語』の〈はやし〉は、仏教的な林の語義を含みつつ、社会や生活の「外」に見られる景物として位置づけられる。

ただし、こうした〈はやし〉に関する傾向は、「山林」のような仏教に関連する語をのぞけば、他の作品には見出しにくい。た

たとえば、『源氏物語』の「山林」以外の三例の〈はやし〉の用例は、次のようなものである。

御寺のかたはら近き林に抜き出でたる筈、そのわたりの山に掘れる野老などの、山里につけてはあはれなれば、たてまつれたまふとて……
（『源氏物語』横笛卷⑤三二〇頁）

右の横笛卷の用例は、「寺」の側近くにある〈はやし〉（竹林）で、仏教と関係のあるものである。

「……かかる林のなかに行ひ勤めたまはむ身は、何ごとかはうらめしくもはづかしくもおぼすべき。……」

（『源氏物語』手習卷⑧二二七頁）

手習卷の用例は、横河の僧都の台詞で、出家した浮舟を〈はやし〉の中で仏道修行する身とする。これは、「山林」と同じ意味と考えられ、仏教と〈はやし〉の関連性は、『源氏物語』の用例でもはつきりとうかがえる。

唯一、仏教との関わりを直接考えなくともよさそうな用例は、次の薄雲卷のものである。

「……春の花の林、秋の野の盛りを、とりどりに人あらそひはべりける、そのころの、げにと心寄るばかりあらはなる定めこそはべらぎなれ。（中略）狭き垣根のうちなりとも、

そのをりをりの心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘り移して、いたづらなる野辺の虫をも住ませて、人に御覽せさせむと思ひたまふるを、いづかたにか御心寄せはべるべからむ」

〔源氏物語〕薄雲卷③一八二頁

右の用例は、光源氏が齋宮の女御（後の秋好中宮）に春秋の優劣を問う場面のものである。注目すべきは、光源氏が「春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘り移して」、「人に御覽せさせむ」と、四季の邸を造営する考えを明かしている点である。

やがてその構想は、少女卷の六条院造営となつて結実する。その際、南東の春の町の庭の様子は、次のように語られる。

南の東は、山高く、春の花の木、教を尽くして植ゑ、池のさまおもしろくすぐれて、……

〔源氏物語〕少女卷③二七四頁

この少女卷では、薄雲卷の「春の花の木をも植ゑわたし」という表現をうける形で春の町がつくられている。少女卷では（はやし）という語は用いられないが、薄雲卷では「春の花の林」と「春の花の木」の両方の表現が用いられており、「春の花の木」も（はやし）との関連性が考えられる。

この『源氏物語』六条院造営と四方四季の町の構想には様々な解釈があり、仏教との関わりも指摘されるところであるが、先行

する作り物語との関係で考えるのであれば、先述の『うつほ物語』の神南備種松の吹上の邸と同じ発想と考えられる。実際に室町時代の『河海抄』^{五十五}に次の指摘がある。

うつほの物語云、紀伊国むろの郡に神なひのたね松といふ長者、吹上浜のわたりに、四面八町のうちに紫檀蘇芳くろかひからも、などいふ木ともを材木にとりて、金銀瑠璃車渠馬腦のおほ殿をつくりかさねて、東の陣のとは春の山、南の陣のとは夏のかげ、西の陣のとは秋の林、きたには松の林四面をめぐりうへたる木草、たゝのすかたせず。此事を摸する歟。たね松、孫の源氏宮のために造て四面八町のうちに四季をわけてすまひけりといへる、相似たり。

〔河海抄〕卷九、三八〇—一頁^{五十六}

『河海抄』が指摘するとおり、『うつほ物語』吹上の邸と、『源氏物語』六条院の構想は似通ったところがある。その構想が最初に語られる際に、光源氏が「春の花の林」と口にするのを、吹上の邸を象徴する四季の（はやし）と、『源氏物語』六条院四季の町の関係の証左と見なすこともできるだろう。もしそうだとすれば、『源氏物語』にも『うつほ物語』がとった、（はやし）による異なる空間の演出という意識は受け継がれている可能性がある。ただし、こうした類似性の指摘は仮定の域を出るものではない。（はやし）と異世界の関係は、『源氏物語』などの平安期の作り物語全体に通じる傾向ではなく、あくまで『うつほ物語』が（は

やし)の語で作り上げた物語の方法と考えるべきであろう。

平安時代の散文作品の中でも、仏教的な意味合いの強い(はやし)の語は、特に『うつほ物語』において異世界の景物と位置づけられた。『うつほ物語』は俊蔭巻と吹上・上巻において、強い伝奇的性格を有しているといわれる。その際に舞台装置として機能しているのが(はやし)なのである。俊蔭巻での(はやし)は、日本国外の、神、仏、仙人があらわれる場として描かれる。吹上・上巻での(はやし)は、「四季の庭」という、非現実的なこの世ならぬ場を作り上げる要素として機能している。『うつほ物語』は、(はやし)を現世と異なる世界をあらわす装置として用いているのである。

こうした『うつほ物語』の描いた(はやし)の表象は、以降の平安時代の貴族社会の作り物語に直接の影響を与えたとは断言しにくい。『うつほ物語』の吹上の「四季の庭」の邸を受容したともいわれる、『源氏物語』の六条院についても、(はやし)を異世界の景物と捉えているのか、あるいは吹上の邸の景物としての(はやし)の表現をなぞっているのか、明確にはしがたい。しかし、元来漢籍や仏教との関係が強かった(はやし)の語が、平安時代中期の『うつほ物語』において、日常生活とは異なる場の表象としてとらえられ始めたことで、単なる木々の集合体ではない、特別な場所としての意味合いが生じたことは特筆すべきことであるように思われる。

おわりに

ここまで、日本古代文学における(はやし)の変遷を、十三世紀以前の古代和歌、奈良時代、平安時代の散文における用例から考察してきた。

古代和歌における(はやし)は、奈良時代の『万葉集』では、人為的に管理された樹木が繁る身近な日常生活の場所であった。しかし、平安時代に入り、歌語としての(はやし)は失われ、新たに雲林院を(くものはやし)と詠むことを媒介として、寺院の(はやし)の意を帯び、(つるのはやし)が詠まれるなど仏教的色彩が強まる。それによって、(はやし)はある種の非日常の場所となった。

一方、奈良時代の散文では、『風土記』では人為的管理下にある場所、身近で日常的な採集の場所であったが、『日本書紀』では、採集の場所でありつつも、現実から逃れ身を隠す場所の意を持つようになり、『続日本紀』における「山林」の語の登場によって仏教の修行の場所へと変化した。そして、平安時代の仮名散文では、極めて強い漢籍や仏教との関係から、「山林」に「入る」「混じる」などの言葉が「出家する」意味を持つようになり、出家者の住む場所そのものが「山林」と表現される例もあらわれ、日常生活の場所とは異なる非日常の場所へと意味を変化させる。特に『うつほ物語』では、(はやし)が非日常の場所をあらわす傾向が顕著であり、(はやし)をそのための装置として用いている。以降の作品に対する直接の影響は稀薄であるが、漢籍や仏教との関

係の強い（はやし）の語が、平安時代中期の作品において、日常生活とは異なる場所の表象としてとらえられ始めたことで、単なる木々の集合体ではない、特別な場所としての意味合いが生じたと見られる。

したがって、奈良時代から平安時代初めの（はやし）は、身近で日常的な採集の場所であったが、平安時代の初めになると非日常生活の場所として意識されるようになったといえる。換言すれば、身近で日常的な採集の場所としての（はやし）を失い、非日常の場所としての（はやし）を改めて得たことになる。その流れは、和歌においても散文においても同様で、背景には、仁平道明氏が指摘し、本稿でも述べてきたように漢籍や仏教の影響があったと見てよい。和歌、散文ともに平安時代の（はやし）が漢籍や仏教を背景としていることから、漢籍や仏教は、平安時代における非日常の場所としての（はやし）の獲得を助けたとみられる。すなわち、日本古代文学における（はやし）は漢籍や仏教を媒介として変遷したのである。

* 本論考は、東洋大学人間科学総合研究所平成二十二（二〇一〇）年度共同研究「木」のある風景の系譜—日本における自然観の漢字文化・西洋文化受容—（大野寿子、千艘秋男、石田仁志、野呂香、早川芳枝、池原陽斉、松岡芳恵、小泉京美、古田正幸）の研究成果の一部であるとともに、日本学術振興会科学研究費（基盤研究C）支給による平成二十一（二〇〇九）～二十三（二〇一一）年度共同研究「超越する「異界」—異文化研究・国語教育・エコロジー教育の架け橋として—」（課題番号、二一五二〇三八三、研究代表者、大野寿子）の研究成果の一部でもある。

- 一 『日本国語大辞典第二版』（小学館、二〇〇〇年）では、〈もり〉が「樹木が多く、こんもりと茂った所」、〈はやし〉が「樹木の群がり生えている所」とある。
- 二 大野寿子・千艘秋男・野呂香・池原陽斉「トボスとしての〈森〉の系譜（古代中世編）—漢字文化受容を中心に—」（東洋大学人間科学総合研究所紀要」第21号、東洋大学人間科学総合研究所、二〇一〇年）。
- 三 前掲注二、一三六～七頁より抜粋。
- 四 「はじめに」執筆は野呂香、第二章早川芳枝、第三章、第四章は古田正幸、「おわりに」は野呂香が担当した。
- 五 野呂香「日本古代文学における自然描写の変遷—和歌における〈はやし〉と〈もり〉の接近—」（東洋大学人間科学総合研究所紀要」第21号、東洋大学人間科学総合研究所、二〇一〇年）。
- 六 『万葉集』は、奈良時代八世紀ごろに編纂された歌集。『万葉集』の本文は、佐竹昭広ほか『補訂版万葉集本文篇』（塙書房、一九九八年補訂版、二〇〇二年補訂版五刷）および『万葉集訳文篇』（塙書房、一九七二年初版、二〇〇二年初版二十一刷）を用い、巻数と歌番号を記す。また、以下本稿の全ての引用における傍線、波線、二重傍線は引用者によるものであり、「……」は、文の前後や途中を省略したことを示すものとする。なお、第一章、第二章の引用における「」内の表記は、原文の表記であり、（）内の詞書は該当歌に付された詞書ではなく、該当歌を含む歌群の詞書である。
- 七 卷七・二〇六八の「星の林」。
- 八 本文は、『新編 国歌大観』（角川書店、一九八三～九二年）を用いる。以下、特に注記のない場合、本文は同書によるものとする。
- 九 その変化は、概ね「古今和歌集」成立から『後撰和歌集』成立の間、十世紀の前半であったと考えられる。
- 十 『拾遺和歌集』の四七二番歌。
- 十一 仏教的な（はやし）の登場は、〈はやし〉を詠む歌の増加にはつながっていない。十世紀後半に成立したとされる『古今和歌六帖』は、四五〇〇首余りの和歌を二十五項五百十七題に分類した類

題和歌集であるが、〈はやし〉は題として採用されていない。したがって、この時代の歌人にとっては、〈はやし〉が詠歌の中心の対象とはなり得ないものであったといえる。

十二 『采花物語』の正確な作者や成立時期は未詳である。本文は、山中裕ほか校注・訳『新編日本古典文学全集采花物語③』（小学館、一九九八年）を用いた。

十三 『後拾遺和歌集』は、応徳三（一〇八六）年奏覧、翌年再奏。

十四 歌合は、歌人を左右二組に分け、和歌を一首ずつ組み合わせて、優劣を競う遊び。

十五 歌の詠者が僧侶であることを考慮すれば、この「はやし」が寺院の「はやし」であるとも考えられる。

十六 堀河天皇に奉覧された百を単位として詠まれた百首和歌。

十七 『古今和歌集』の撰者は、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人。

十八 『古事記』の本文は、倉野憲司・武田祐吉校注『日本古典文学大系 古事記 祝詞』（岩波書店、一九六六年）を用い、引用部の頁数を記す。

十九 この他に、書物自体は残っていないが、一部が他の文書に引用されることで部分的に内容が判明する逸文も存在する。逸文中にも〈はやし〉の用例が見えるが、いずれも『風土記』からの引用であるとは認められないため、ここでは取りあげない。

二十 『出雲国風土記』は、巻末の署名によれば天平五（七三三）年二月成立。本文は、秋本吉郎校注『日本古典文学大系 風土記』（岩波書店、一九五八年）を用い、引用部の郡名と頁数を記す。

二十一 〈はやし〉を「樹林」と記す例は、『出雲国風土記』のみに確認される。該書の編纂にかかわった人々のみに用いられた用字であると考えられる。

二十二 『常陸国風土記』は、養老年間（七一七〜七二四）末頃までに成立。本文は、秋本吉郎校注『日本古典文学大系 風土記』（岩波書店、一九五八年）を用い、引用部の郡名と頁数を記す。

二十三 『日本書紀』本文は、坂本太郎ほか校注『日本古典文学大系 日本書紀上・下』（岩波書店、一九六五〜七年）を用い、巻数と引用部の頁数を記す。

二十四 同じく平安時代初頭に成立した散文作品に仏教説話集『日本霊

異記』があるが、固有名詞をのぞくと、〈はやし〉は庭に植えられた「桑林」の一例しか用例がないため本稿では取りあげない。

二十五 『続日本紀』の本文は、青木和夫ほか校注『新日本古典文学大系 続日本紀一〜五』（岩波書店、一九八九〜九八年）を用い、引用部の頁数を記す。

二十六 『続日本紀五』、三〇七頁

二十七 『続日本紀五』、三一頁

二十八 残りの一例は武蔵国入間郡の伴部直赤男が西大寺に林を献上したという記録で、光仁天皇の宝龜八（七七七）年六月五日の条に見られる。

二十九 『続日本紀二』、二二頁

三十 『続日本紀四』、一四頁

三十一 仁平道明「林のある風景―漢と和と―」（『東アジアの中の平安文学 論集平安文学 第二号』、勉誠社、一九九五年）。

三十二 前掲注三十一、四六頁。

三十三 『凌雲新集』（略して『凌雲集』とも）は、嵯峨天皇の勅を受けた日本初の勅撰漢詩集である。弘仁五年（八一四）に成立した。

三十四 『文華秀麗集』は、『凌雲集』に続いて嵯峨天皇の勅を受けた二番目の勅撰漢詩集である。弘仁九年（八一八）に成立した。

三十五 『経国集』は淳和天皇の勅を受けた三番目の勅撰漢詩集である。天長四年（八二七）に成立した。全二〇巻だが、現存するのは六巻のみ。

三十六 現存する平安期の散文作品中、写本が鎌倉時代以前にさかのほることができる作り物語は極めて少ない。最も著名な『源氏物語』にしても、鎌倉時代以降の写本しか残らない。その他、大半の作り物語が、全編揃った形の完全な本（完本）は、室町時代末期以降のものである。一方で、作品のタイトルだけが知られる作品は極めて多く、そのほとんどが今に伝わることなく、散逸してしまっただけと考えられている。

三十七 『風葉和歌集』は文永八年（一二二一）に成立した私撰集である。撰者未詳だが、藤原為家が擬される。平安時代と鎌倉初期の作り物語の和歌を集めている。

三十八 『うつほ物語』は十世紀後半に成立したとされる作り物語である。正確な作者、成立時期などは不明であるが、大体『源氏物語』

成立前には書かれていたと見てよいようである。

三十九 『風葉和歌集』における「林」の語は、七四九番歌の『うつほ物語』の朱雀院の和歌「撫で生はず松の林に今宵より千代をば見せよ鶴の群鳥」(引用は『うつほ物語』沖つ白波卷・四四九頁による)に見られる「松の林」一例である。また、建物の名称であるが、一一一番歌の詞書には、『うつほ物語』吹上・上巻から採られた、「はやしの院」の語も見出すことができる。他の関連語としては、『源氏物語』から採られた三三八番歌の詞書に、「雲林院」が一例見られる。

四十 「林」に関連する熟語と、顕著な上接語を持たない「林」を「その他」として数えた。また、「林」の文字を含む関連語については合計数には含まず、備考欄に用例数と共に掲げた。なお、平安期に成立したと考えられる作品のうち、説話集の『今昔物語集』については傾向が大きく異なる。別稿「日本古典文学における〈林〉の変遷—後編—」を参照されたい。

四十一 前掲注十二参照。

四十二 「竹取物語」は、九世紀後半から一〇世紀前半にかけて成立したと見られる、作者未詳の作り物語である。『源氏物語』に物語の祖と称する記述があり、後代の物語に影響を与えた。

四十三 「落窪物語」は、一〇世紀中ごろ、『源氏物語』以前に成立したと思しき作り物語である。継子いじめの話型で著名で、『源氏物語』の構想にも影響を与えている。

四十四 「源氏物語」は、一一世紀初頭に成立した作り物語である。『紫式部日記』の作者である、紫式部の作とされる。『源氏』以前の様々な文学作品を受容した長大な作品で、『源氏物語』以後の文学にも多大な影響を及ぼした。

四十五 『土左日記』は、承平五年(九三五)ころに紀貫之によって書かれた、後名の日記文学作品である。亡児への哀傷の想いを綴っており、仮名の日記文学作品に影響を与えた。

四十六 仁平氏(前掲注三十一、三七頁)は、「山林」の語と『法華経』との関連を指摘している。

四十七 『大和物語』は、天曆年間(九五〇年前後)に成立したと思しき、歌物語である。作者未詳。和歌を中心とした説話を集成している。『大和物語』の本文は、高橋正治ほか校注『新編日本古典文学全集

竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』(小学館、一九九四年)を用い、引用部の段数と頁数を記す。

四十八 『平中物語』は一〇世紀後半に成立した歌物語である。作者は未詳。色好みとして知られる、「平中」こと平貞文の逸話を集めている。『平中物語』の本文は、清水好子ほか校注『新編日本古典文学全集竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』(小学館、一九九四年)を用い、引用部の段数と頁数を記す。

四十九 『うつほ物語』の本文は、室城秀之校注『うつほ物語全改訂版』(おうふう、二〇〇一年)により、巻名の後に頁数を記す。

五十 『源氏物語』の本文は、石田穰二・清水好子校注『新潮日本古典集成源氏物語』(新潮社、一九七六―八五年)により、巻名の後に、集成本の巻数を○数字で、頁数をその後に記す。

五十一 他にも、「山林」にも家と住みぬべき心地すれど」(『うつほ物語』沖つ白波卷・四五七頁)のような例は、「山林」を出家した者が住む場所として表現している。

五十二 出家に関連し、他の作品でも頻出する「山林」二二例は俊蔭巻、吹上・上巻には用いられておらず、この二巻にその他の「林」の語が偏って用いられている。

五十三 「絵解」(絵詞、絵注、絵指示、絵解本文なども)は『うつほ物語』独特の表現で、専ら本文では説明しきれない場面や画面の説明をおこなう描写である。巻や場面によっても性格が異なり、一様に定義することには困難をともなうが、本稿の引用箇所ではほぼ同質のものとして扱う。

五十四 「林の院」については、建物の名称と判断したため、「林」の語の用例数には数えていない。しかし、命名の由来は「林」を見るための院と考えられる。吹上の邸には他にも、祓をおこなうための「渚の院」があり、目的と建物の名称がほぼ一致する傾向が指摘できる。

五十五 『河海抄』は、貞治年間(一一三六―〇年代)に成立した、『源氏物語』の注釈書である。作者は四辻善成。『源氏物語』を含む平安文学の研究に現在でも影響を残している。なお、『うつほ物語』は室町末期以前の写本が現存しないが、この『河海抄』の引用や、先述の『風葉和歌集』が「はやしの院」を詞書に持つことによつて、鎌倉後期～室町前期の『うつほ物語』の吹上・上巻の四季

五十六

の町も、「林」の語で表現されていたことがうかがえる。

『河海抄』の本文は、玉上琢弥編『紫明抄河海抄』（角川書店、一九六八年）により、巻数と同書の頁数を記す。また、適宜句読点を補った。

*一 人間科学総合研究所客員研究員

*二 人間科学総合研究所院生研究員・東洋大学大学院文学研究科国文学専攻

*三 人間科学総合研究所院生研究員・東洋大学大学院文学研究科国文学専攻

Changes in expressions regarding “groves” in Japanese classical literature Part1

Kaori NORO * 1, Yoshie HAYAKAWA * 2, Masayuki FURUTA * 3

The aim of this paper is to point out some changes in expressions regarding “groves (林)” in Japanese classical literature. We compared the usage of the “groves” in the *waka* and prose of Nara and Heian periods. In *waka* and prose of the Nara period, “groves” were depicted as a locus of daily life. However, in the *waka* and prose of the Heian period, this term became associated with poetic and non-prosaic life. This same tendency to elevate the register of the term “林” that is seen in prose can also be found in *waka*. A likely reason for this occurrence is the influence of Buddhism and classic Chinese.

Key words: Ancient Japanese literature, *Waka*, Nara era literature, Heian period literature, Japanese lexical shifts, Grove

* 1 A visiting member of the Institute of Human Sciences at Toyo University

* 2 A graduate student in the Graduate School of Japanese Literature, and a graduate member of the Institute of Human Sciences at Toyo University

* 3 A graduate student in the Graduate School of Japanese Literature, and a graduate member of the Institute of Human Sciences at Toyo University